



1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間

作文コンクール

2025

入賞作品集



1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて!

北朝鮮人権侵害問題啓発週間  
作文コンクール 2025

入賞作品集

## はじめに

---

北朝鮮当局による日本人拉致問題は、人命そのものがかかった人道問題であると同時に、国家主権の侵害であり、日本政府は、すべての拉致被害者の一日も早い帰国を実現するため、全力で取り組んでいます。

しかし、2002年以降、拉致被害者の帰国は未だ実現しておらず、被害者の方々は今なお自由を奪われ、厳しい生活を強いられています。拉致問題は決して過去の出来事ではなく、現在進行形の深刻な課題であることを、改めて強調しなければなりません。

こうした中、国内では拉致問題に関する啓発活動を推進し、国民の理解と関心を一層高める取組を進めています。拉致問題を風化させないためには、国民一人ひとりがこの問題を自分事として捉え、声を上げ続けることが必要不可欠です。

とりわけ、これまで拉致問題に触れる機会の少なかった若い世代の理解と関心を高めることが重要な課題となっています。

本コンクールには、全国から3,222点ものすばらしい作品を御応募いただきました。その中から特に優れた16作品を選出し、本作品集に収録しております。入賞作品には、被害者や御家族の苦しみに寄り添った、解決への強い思いが綴られています。

中には、解決への強い思いを原動力に、自ら考え行動し、その意志を周囲へと広げながら変化を生み出している若者もいます。こうした取組は、拉致問題の現実を広く伝える力となり、社会全体における理解を深める大きな一歩であり、解決に向けた力強い後押しとなります。どうか本作品集を通じて、拉致問題の深刻さと解決への思いがさらに広がり、理解と関心が一層高まることを願っています。

最後に、本コンクールに御応募いただいた皆様、指導にあたられた先生方、そして本事業を支えてくださった関係者の皆様に、改めて深く感謝申し上げます。皆様の取組が、拉致問題の解決に向けた大きな力となることを確信しつつ、引き続き御理解と御協力をお願い申し上げます。

令和8年2月 政府拉致問題対策本部

## 作品総数

# 全3,222作品

## 最終審査員

北朝鮮による拉致被害者家族連絡会  
横田 拓也 代表

株式会社 読売新聞社  
池亀 創 編集長

法務省  
隄 良行 大臣官房審議官

ニューヨーク大学  
ロバート・ボイントン 教授

外務省  
大塚 健吾 アジア大洋州局参事官

神戸大学  
ルックス・ジョン・マシュー 准教授

文部科学省  
堀野 晶三 学習基盤審議官

北朝鮮人権委員会 (HRNK)  
グレッグ・スカラトー President and CEO

内閣官房拉致問題対策本部事務局  
清水 雄策 内閣審議官

※記載の役職は審査当時のもの



表彰式の様子 (2025年12月13日、東京都千代田区イイノホール)

## 目次

<b>団体賞</b>		05
<b>中学生部門</b>		
最優秀賞	片岡 彩希 (鳥取県)米子北斗中学校 3年 第一歩のための第一歩	08
優秀賞	名古屋 夏音 (新潟県)新潟市立高志中等教育学校 1年 社会へ繋げる「声のバトンリレー」	09
優秀賞	倉野 真衣 (大分県)臼杵市立野津中学校 3年 日常を届けたい	10
特別賞	陣 もも香 (東京都)東京都立両国高等学校附属中学校 2年 自分達にできることは何か	11
特別賞	吉田 太陽 (京都府)南丹市立園部中学校 3年 海を越えたその先に	12
特別賞	櫻井 心葉 (鹿児島県)鹿児島市立星峯中学校 3年 私たちの使命	13
<b>高校生部門</b>		
最優秀賞	羽島 奈穂 (鹿児島県)鹿児島県立川内高等学校 2年 救出のため、未来の私達のため	16
優秀賞	津元 あかり (熊本県)熊本県立済々黌高等学校 2年 私たちにできること	17
優秀賞	福留 豪希 (鹿児島県)鹿児島県立甲南高等学校 2年 今しかない	18
特別賞	小林 陽菜 (福島県)福島県立岩瀬農業高等学校 1年 失った人たちの思いと感情	19
特別賞	小暮 藍花 (東京都)瀧野川女子学園中学高等学校 2年 「普通の日常」を取り戻す	20
特別賞	豊泉 理紗 (沖縄県)八洲学園大学国際高等学校 2年 「奪われた13歳。忘れない、忘れまい。」	21
<b>英語エッセイ部門</b>		
中学生部門 最優秀賞	スシダバンチ 大史 (鳥取県)米子北斗中学校 3年 Until they return	24
中学生部門 優秀賞	村上 華梗 (熊本県)熊本県立宇土中学校 3年 How to solve the abduction issue	26
高校生部門 最優秀賞	石川 とわ子 (東京都)東京都私立高校 2年 Bring the abduction issue onto a global stage	28
高校生部門 優秀賞	杉山 瑚胡 (岐阜県)鶯谷高等学校 1年 Everyone Has The Right To Be Happy	30

## 団体賞

本作文コンクールに積極的に参加している学校を対象に団体賞を設けております。  
今年度、団体賞を受賞されました学校は次のとおりです。

(東京都) 瀧野川女子学園中学高等学校

(東京都) 東京都立両国高等学校附属中学校

(神奈川県) 神奈川県立厚木王子高等学校

(新潟県) 新潟市立高志中等教育学校

(静岡県) 浜松啓陽高等学校

(京都府) 南丹市立園部中学校

(兵庫県) 兵庫県立姫路海稜高等学校

(鳥取県) 米子北斗中学校

(福岡県) 行橋市立行橋中学校

(熊本県) 熊本県立宇土中学校

---

この度の受賞、誠におめでとうございます。

応募者皆様の、また学校全体での取組に深く敬意を表します。

今後とも、拉致問題への理解を深める取組に御協力よろしくお願ひいたします。



---

# 中学生部門

---





## 第一歩のための第一歩

米子北斗中学校 3年

片岡 彩希

もっと知らなければ。

松本京子さんのご兄弟、松本孟さんと、横田めぐみさんのご兄弟、横田拓也さんのお話を聞いて一番にこう思った。

私はこれまで、昔、北朝鮮に拉致された人がいてまだ日本に戻れていない人がいる。それがわかっていたら、拉致問題について理解できていると思っていた。しかしそれは大きな思い違いだった。

今年8月に中学生サミットに参加した。横田さんは「もしめぐみちゃんが帰ってきたら、まず『ごめんなさい』と謝りたい。『おかえり』はその次だ」とおっしゃった。私はそれに衝撃を受けた。なぜなら今年6月、松本さんが学校での講演で「おかえりと言いたい。それだけだ」とおっしゃっていたからだ。その切実な思いが心に残っていたため、サミットに向け拉致問題について考えているときも「助けられていない自分たちに責任がある」と思ったことがなかった。しかし、確かにそうだ。いくら北朝鮮が拒否しているからといって、自分には何もできないと諦めていいわけではないのだ。

被害者家族の方々は、誰よりも家族が帰ってくることを望み行動しているはずなのに、40年以上年月が経っても満足できる進展がほとんどない。そんなもどかしさをひしひしと感じ、より一層、今、自分に出来ることをしようと決意した。

サミットで私たちのグループは、「被害者は拉致された方だが、そのご家族も同じほど辛さを抱えているのではないか」ということについて話し合った。悲しい、寂しい、怖い、そして会いたい。このような感情は拉致された方もご家族も、どちらもずっと抱えているのではないだろうか。例えば私が、休みの日に友達に会って話したいと思ったとき、お互いが会いたいと思えば会うことができる。でも、それができない。自分の日常に重ねてみると、同じ思いを持っているのに通じ合えない苦しさを痛いほど感じた。

お二人の率直な思いを聞き、ここで終わってはいけない。もっと知らなくてはと強く感じた。拉致問題という深刻なイメージに躊躇い、なかなか一歩踏み込んでみようと思えないかもしれない。でも私がそうだったように何かきっかけがあれば詳しく知り、解決に繋がる行動をしようと思えるのではないだろうか。私は11月に米子で開催された政府主催の拉致問題についての国民の集いで発表を行った。身近な人はもちろん、より多くの人に決して昔のことではない拉致問題の現状や、ご家族の思いを伝えた。そのような方法で、躊躇ってしまっている人が第一歩を踏み出すための手助けになればと願った。それがその時の私にできることだった。そして、これからも今の私に何ができるのかを探し続けていく。

### 入賞者のコメント

拉致問題は過去のことでありません。現状やご家族の思いを聞くと、何もしないままではられません。知ることは力になります。まず、「知る」という一歩を踏み出しませんか。



## 社会へ繋げる「声のバトンリレー」

新潟市立高志中等教育学校 1年

### 名古屋 夏音

アニメ「めぐみ」。見終わった時に言葉を失った私がいた。当時13歳の横田めぐみさんは、私と同年だった。学校生活、家族や友達とたわいもない会話をしたり、オシャレをしたりして、毎日幸せな日常を送っていたはずだった。なのに突然「拉致」という形で幸せな日常から引き離され、全て何もかもを奪われてしまったことに衝撃を受けた。もし私だったらどれだけの恐怖と苦しみを感じたことだろう。考えるだけで背筋が凍った。そしてアニメに出て来ためぐみさんのご家族から言葉だけじゃ言い表せない深い悲しみと共に、「必ず取り戻す」という揺るがない信念を持っていたことがとても心に残った。

このアニメをきっかけにめぐみさんのことを調べるようになった。父の滋さんは、全国各地で講演を行い、母の早紀江さんも兄弟の拓也さん、哲也さんもめぐみさんに帰ってきてほしいという願いを胸に社会の中で声をあげ続けている。家族一体で厳しい社会の中で行動しているのだ。私はこのことにとっても胸を打たれた。そして、私達はこのままでいいのかと。

私はめぐみさんを含めた拉致被害者救出に向けてどうしたらいいか考えた。そのために必要なのは、やはり何事も支える社会が必要だと思う。その社会を実現させるには、国民の関心を高めるのが一つだ。だから私は「声のバトンリレー」を大切にしたいと考えた。私が拉致問題や今の現状を家族や友達に話すこと。それを聞いた人は更に別の人たちに伝えること。このようにまるでリレーみたいに声が広がっていけば、国民の関心が高まるのと同時に、社会全体に拉致問題を解決せねばという思いが根付いてくる。そしてバトンリレーのすごいところは、誰にでも始められることだ。特別な立場にいなくても「知っていることを伝える」だけで参加できるのだ。そしてその一つ一つの声が集まることで、社会が行動し、政治や国際社会を動かす大きな原動力に繋がる。バトンが積み重なっていくことで、やがて大きな力を生み出すのだ。だから私は自分の声を止めずに次の人へ渡し続けたいと思う。

私の声はまだ小さいがその声はやがて大きくなって、被害者家族、社会へ届くことを願っている。そしてそのような社会を具現化させ、めぐみさんをはじめとする全ての拉致被害者が家族のもとへ一刻も早く帰れる日が来るように、私はこれからもリレーを続けていきたい。

#### 入賞者のコメント

拉致問題は過去のことでなく、今も続く現実です。奪われた日常に思いを寄せ、声を上げ続けましょう。それは、やがて大きな力になるはずです。目をそらさず、一緒に行動していきましょう。



## 日常を届けたい

臼杵市立野津中学校 3年

倉野 真衣

人並みの人生。あたたかいごはんがある。友達と遊ぶ。中学生らしく反抗期を過ごす。何気なく空を見上げる…。そんな日常を送っている中、私は横田めぐみさんを知った。

初めて知ったのは小学6年生、道徳の授業の時だった。アニメ「めぐみ」を見た。その時の私は「こんなこともあるんだ。」くらいに軽く受け流し、深く考えることはなかった。

二度目に「めぐみ」を見たのは中学校2年生になってから。最初は「これ見たことあるな。」と思いながら真面目に見る姿勢に欠けていた。しかし、一度目に見た時と私の心の反応は全く違った。いつの間にかアニメに引き込まれていき、苦しい気持ちになっていたのだ。

私は、自分の他人に対する共感能力は著しく低いと思っていた。みんながニュースを見ていてかわいそうだと言っているのに自分は関心をもたない事も多い。でもアニメを見る中で、めぐみさんやめぐみさんの家族の気持ちに共感できている自分がいた。驚いた。同時にその驚きが「もっと知りたい。」という意欲に変わっていた。拉致されためぐみさんを始めとした被害者の方々、そしてその帰りを待つ皆さんの人たち。この人たちは今までどれだけ苦しい思いでこんなにも長い時間を生きてきたのか。それを確かめるため、私は拉致問題中学生サミットに参加した。

サミットでは横田めぐみさんの弟、横田拓也さんの講話があった。めぐみさんが拉致されてから48年が経過しているという事実を改めて確認した。私には考えられないくらい長い時間だ。また、めぐみさんの帰りを待つ中、強く望んでいた再会を果たせずに亡くなってしまった父、滋さんの思いも伝えられた。そんな講話の中で一番心に残ったのは母、早紀江さんの夢、「草原に寝っ転がって青空を見ながら話したい。」というもの。これは、私たちなら簡単にできること。けれどそんな簡単なことでさえできない人がいる。とても悲しい現実だと思った。絶対にこのまま終わらせてはいけない問題だと痛感した。

私が嫌な事が重なって気持ちが沈んでいた時、空を見る余裕などなかった。どれだけ前に進もうとしてもずっと立ち止まっているような気持ちだった。その後、心が晴れた時にふと見上げた空は、今まで私が知っていた空ではなかった。信じられないくらい美しい眺めだった。本当に感動した。この景色をめぐみさんと家族の皆さんと一緒に見てもらいたい。空の美しさを改めて知ってもらいたい。

拉致問題の解決は決して簡単なことではない。その中で私たちにできること。それは、この問題について考え続けること。問題を風化させないようにたくさんの人に伝え続けること。被害者の方々の一刻も早い帰国を願い続けること…。日常の中に青い空がないすべての人々に、この空の美しさを届けたい。

### 入賞者のコメント

今回、幸せな暮らしが当たり前ではないことに気がつきました。私たちが傍観者であることを辞めることが救出への一歩につながります。



## 自分達にできることは何か

東京都立両国高等学校附属中学校 2年

### 陣 もも香

約47年前、新潟県で横田めぐみさんが拉致されるという衝撃的な事件が起きました。事件当時、めぐみさんは私と同じ中学生でした。学校に通って、友達と楽しく笑い合い、未来の夢を描いていた彼女が、突然日常を奪われるという理不尽な出来事があったと考えると、胸が締めつけられる思いがします。もし自分や周りの友達が同じような目に遭ったら、と想像するだけでとても恐ろしく思います。

めぐみさんのご両親や同級生の方は、どれほどつらい思いをしてきたのだろうと思います。ご両親は彼女を取り戻すために長い年月戦い続けています。同級生たちも、大切な友達を失った悲しみや無力感を抱えながら日々を過ごしてきたはずです。

この事件は、ひとりの少女とその周囲の人々の人生を大きく変えてしまっただけでなく、私たちに人権の大切さや平和の意義について深く考えさせるものです。

私は、めぐみさんや彼女の家族の思いを胸に、これからの自分の生き方を見つめ直したいと思います。まず、拉致問題について知識を深めることが重要だと考えます。そのために、ニュースを見たり、本を読んだりすることで、なぜこうした問題が起きたのかを学びたいです。そして署名活動に参加することで、めぐみさんや他の拉致被害を救うための声を広げていきたいです。また、学校や友達との間でこの問題について話し合い、少しでも多くの人に関心を持ってもらう努力をすることもできます。

さらに、自分の周りの人々を大切に、日々の当たり前前に感謝する気持ちを忘れないことも、平和を守る第一歩だと思います。家族や友達と支え合いながら、困っている人に手を差し伸べることができるような人になりたいです。こうした小さな行動が、社会を少しずつ変えていく力になると信じています。

めぐみさんの事件を通じて、私たち一人一人が平和を守る役割を担っているのだと改めて感じました。今この瞬間にも、自由や安全が奪われている人々がいる現実を忘れず、自分の行動で少しでも良い未来を作る手助けをしていきたいです。そして、めぐみさんがいつか必ず家族のもとへ帰れる日が来ることを信じ、これからも平和を願い続けます。

#### 入賞者のコメント

作文を書くにあたって、拉致被害者の方々が今も帰国を待ち続けている現実を改めて知りました。私たち国民が関心を持ち続けることが、解決への力になると信じています。拉致問題を身近なこととして一緒に考えてみてください。



特別賞

## 海を越えたその先に

南丹市立園部中学校 3年

吉田 太陽

寒く、冷たく、暗い。そんな海を越えたその先に、約50年もの間、日本に帰りたい、家族に会いたいと願っている日本人が何人もいる。

1977年秋。いつもと変わらない朝、何気ない会話を交わし、「いってきます」と家を出ていった横田めぐみさん。それが家族と交わした最後の言葉。部活動から帰る通学路の道中で、突然連れ去られたのだ。北朝鮮による拉致だ。両親である滋さん、早紀江さんは街中を探しまわった。懸命に搜索を続けたものの、めぐみさんを見つけることはできなかった。「新潟の海は怖い。」日本人拉致問題啓発アニメ「めぐみ」の終盤のシーンでご両親が話されていた言葉だ。どんな状況下であったとしても、決して諦めずに活動を続けて来られたご両親が、細くつぶやくように言った海への恐怖の言葉が、胸に刺さった。

私の曾祖父は、戦争を経験した。戦時中、海を越えて、生活の拠点を満州に移し懸命に汗を流し、家族のために、その日を生き抜くために働いた。でも、日本は戦争に負けた。生活が一変し、ロシア人に捕虜として捕まった。いわゆるシベリア抑留だ。曾祖父は、奇跡が重なり、海を越え、故郷に帰ることができた。「日本政府の懸命な働きかけのおかげだった」と、終戦後に帰国できた抑留者が口にしていたそうだ。だから、私は今、ここにいる。そのことに心から感謝している。

拉致問題もシベリア抑留と共通する点が多くあると思う。しかし、ただ一つ違うのは、拉致問題は約50年も解決することなく、多くの人を苦しめていることだ。奪われた時間は戻らない。亡くなってしまった人の命も戻ってこない。「帰りたいのに帰れない。」その気持ちは、同じなのではないだろうか。それなのに、今もなお、自分の故郷に帰ることができていない人がたくさんいる。

「必ず取り戻す。」拉致問題対策本部が作成したポスターが、私の通う中学校には、一番人通りの多い玄関に貼ってある。授業を受けた日、着物姿のめぐみさんと目が合ったそのときに、自分と同じような中学生であることを再認識した。たった一言。「ただいま」を言えることができる日がなぜ実現していないのだろうか。私の中で怒りに近い感情が芽生えるのを感じた。

今思うと、拉致問題を解決する上で、最も大切な本質とも言える「他人事ではなく自分事」として捉える瞬間であったのかもしれない。政府が懸命に取り組んでいる問題に、私たちの世代で終止符を打つ。そのために若い世代が関心を持ち、問題に向き合うきっかけを作るために、私は発信し続ける。海を越えたその先にある希望の光を絶やさないために。

### 入賞者のコメント

今も帰りたいのに帰れない人がいる。拉致問題は一人一人が自分事として考えることで解決に近づきます。まずは、知ることから始めてみませんか？



## 私たちの使命

鹿児島市立星峯中学校 3年

### 櫻井 心葉

東京から帰って来て、4人で肩を並べた写真を眺めている。今年の夏、初めて県を超えて出会った友達との大切な一枚だ。皆、人権問題に興味があり、都道府県の代表として拉致問題に関する中学生サミットに参加した仲間だ。このサミットに参加して私の拉致問題への意識は大きく変わった。

「いってきます。ただいま。それは当たり前？」

これは、同じグループの仲間と作ったコマーシャルのキャッチコピーだ。サミットの中で拉致被害者横田めぐみさんの弟である、横田拓也さんは13歳で突然めぐみさんが、姿を消してしまった時の事を自分の幼い頃の記憶と重ねながら話された。

横田さん一家は、めぐみさんの実名を公表するかしないか、する事で探す手段は増えるが、公表すると生命の保障がなくなるのではないかと何度も話し合いを重ねたそうだ。母である早紀江さんや拓也さんたちは反対したが、父である滋さんは実名でなければ誰も興味を持たない、助けるためにできることは何でもしようとして実名を公表する事を決めたという。拉致された本人はもちろん、拉致された家族の生活まで奪ってしまうなんて、あまりに酷いとすごく腹が立った。そして、今まで拉致問題の事を調べたり、話を聞いたりしてこの問題をわかったつもりになっていただけだったと、はっとした。私は、拉致被害者家族の視点には到底及ばない事を知り、本当に自分の事として向き合っていたのだろうか、上辺だけの活動だったような気がして恥ずかしくなった。拓也さんは、

「誰かではなく、自分の事として自分の視点で考えてほしい。」

と言い、その言葉からグループでは当たり前の日常に感謝する事を話し合った。

参加のきっかけでもある、鹿児島で起きた拉致被害の事について実際に拉致被害者家族の市川健一さんから聞いた話をメンバーにすることができた。他にも、市川さん夫婦を訪ね、修一さんの情報提供のビラ配りに参加したことや、学校での人権教室で拉致問題について自分の調べた事や市川さん夫婦の思いを伝えることができた。今まで直接話を聞いた事をなかなか同じ世代に話す機会はなかったが、自分から話す努力もしていなかったと思う。今回サミットに参加して、横田さんの言葉に知る事だけでなく、もう、伝える側にならなくてはいけないのだと背中を押された気がした。

今年、同じく健一さんの話を聞いた高校生の先輩方は拉致問題を考える勉強会を企画された。自分一人では難しいことも一緒に活動できる仲間がいればもっと積極的に話ができると思う。「ただいま」の声を聞くまでは写真の仲間たちと共に走り続けていきたい。

#### 入賞者のコメント

私ができることは小さなことかもしれませんが、しかし、一人では難しいことも仲間がいれば達成できると思います。誰かの事ではなく自分の事として、拉致問題を考えていきませんか。



---

# 高校生部門

---





## 救出のため、未来の私達のため

鹿児島県立川内高等学校 2年

### 羽島 奈穂

「先見えぬ 長き道のり 耐えて来た 安堵する日は いつの事かと」市川龍子作  
47回目の夏も「ただいま」の声はなかった。

私は中3の時から拉致問題に関心を持ち、鹿児島の拉致被害者市川修一さんの兄、健一さん龍子さんご夫妻の署名活動などを共にしている。今年の2月には、通う高校の全校生徒に私が書いた拉致問題解決を願う作文を朗読した。私の作文が拉致問題を考えるきっかけになるよう願いを込めた。紙一杯に思いを綴ってくれた友達の感想には、少しずつ解決を願う輪が広がっていると思った。しかし僅か一行のみの感想、そして署名活動では多くの若者が他人事のように目の前を通り過ぎるのも現実だった。その関心の薄さに「このままではいけない」という思いを募らせた私は、拉致問題に関心を寄せる鹿児島の高校生7人と「鹿児島ブルーリボンかえるの会」を立ち上げ、「高校生による若者の為の拉致問題勉強会」を実施することにした。企画・運営・参加者募集など課題も山積していたが、多くの方々のサポートにより当日は中学生から大人の方まで約35名にご参加いただいた。勉強会における市川さんご夫妻の講演に、参加者は涙を浮かべ聴き入っていた。その講演の中で私が最も印象に残った言葉がある。「もし、修一が拉致されていなかったらどんな生活を送っていたのだろう。修一にはもっと楽しい青春があったのではないか。」

と。また、会場には市川龍子さんが拉致問題への想いを綴った短歌集も展示した。

「彼の国へ 助けを求める 弟に 届けとばかりに 声を漕らして」

この歌は、ご家族が朝鮮半島の北緯38度線の前で「修一どこにいるの、姿を見せて」と呼び続けた、という龍子さんのお話と重なった。そして、私には一番伝えたい歌がある。

「彼の国へ 飛んでいきたい 今すぐに 翼が欲しいと 母の声かな」

可能ならば自らの手で日本に連れて帰りたい。いつまでも救い出せない苛立ちや怒り、悲しみ。この短歌には全拉致被害者家族の切実な願いが込められている。

生まれる前のこと、忘れてはいけないこと。しかし多くの若者は「知らない、分からない、怖い」という理由で拉致問題に触れようとしない。そもそも触れる機会が少ないのだ。だからこそ、大人も含め学校や家庭の中でもっと語り続けられていくべきだと私は訴えたい。問題の風化を最も恐れる拉致被害者家族の皆様。全拉致被害者救出のため、二度と拉致事件を起こさせないために「風化させない」という言葉があるのだ。

私は拉致被害者家族の皆様にごう伝えたい。

「一緒に頑張りましょう。」

と。これからも「楽しい青春」を希求する日本の若者の一人として声をあげ続けたい。

#### 入賞者のコメント

「風化させない」この言葉に込められた様々な意味を活動を通して分かるようになりました。今、あなたの隣にいる大切な人が拉致されたらどうしますか？自分事として考える、行動を起こしてみる、それが解決の第一歩。



## 私たちにできること

熊本県立済々黌高等学校 2年

### 津元 あかり

「拉致問題」と聞いても、これまでの私は昔起こった大変な問題だ、という漠然とイメージを持つだけだった。しかし、今回拉致問題についての作文を書くことを決め、拉致問題を詳しく調べたことで、感じる事、考えることが多くあった。

調べていく中で強く印象に残ったのが、田口八重子さんの拉致の話である。田口八重子さんは女手ひとつで子供2人を育てるために夜遅くまで働いていたという。仕事が終わるのは深夜。そんな時間に子ども達を起こしてしまうのは可哀想だから、という理由で、彼女はいつも、子供達をベビーホテルに預けてから出勤していた。しかしある日、いつものように子ども達をベビーホテルに預けた後、田口八重子さんは拉致された。この話を聞いて、私は表現しようがない心苦しい気持ちになった。自分の知らない場所に、突然連れて行かれてしまうのにどれだけ恐怖を感じただろう。子ども思いだった彼女は、どれだけ子ども達のことを心配に思っただろう。きっと、私たちが想像できないほどの苦しみを味わったはずだ。

そして、このような悲惨な現実を伝えてくれる、被害者家族の方々の高齢化が問題となっている。まだ拉致問題は完全に解決したわけではないのに、拉致問題について知らないから、といった理由で、このまま解決されずに終わってしまうのは、あってはならないことだと思う。

では、私たちにできることは何なのか。私が考える大切なことは、私たち一人ひとりが拉致問題についてより詳しく理解することである。過去の出来事、自分には関係の無い出来事だと捉えてはいけないのではないと思う。時代や場所が違えば、自分の身の周りで起きた問題であるかもしれないのだ。そういった共感や想像力は、拉致問題について知ることによって生まれてくるのだと思う。また、拉致問題についての認識を社会に広めるためには、教育現場での人権学習として拉致問題を取り上げたり、多くの人の目に入るインターネットを用いて情報を発信したり、署名活動を行ったりといったことが大切であると思う。こういった、一人ではできない、多くの人の力が必要になる活動をみんなで協力して行うことで、この拉致問題を解決する一歩になるのではないか。

#### 入賞者のコメント

この作文を通して、自分には関係ないと思っていた拉致問題は、実は誰にでも起こりうる問題だということを実感しました。まずは拉致問題について知り、自分事として考えることから始めませんか？



## 今しかない

鹿児島県立甲南高等学校 2年

### 福留 豪希

——今年の夏も『ただいま』という声を聞けなかった——弟の修一さんを北朝鮮に拉致されてから47年となる8月12日、市川健一さんは無念の思いを滲ませた。

市川さんをはじめ拉致被害者のご家族は、被害者の一刻も早い帰国の実現を願い、長年闘い続けている。高齢となった親・兄弟にとって、被害者との再会は何よりも切実な願いである。

私は昨年12月に開催されたシンポジウムで、有本恵子さんの父・明弘さんと横田めぐみさんの母・早紀江さんをお見かけした。我が子をなんとしても取り戻したいという早紀江さんの強い訴えを聞き、自分に出来ることを考えると同時に、親にとって一日一日がとても大切であることを改めて実感した。しかし今年の2月、明弘さんの訃報が報じられた。我が子との再会を果たせないまま亡くなられた方がまた一人増えてしまった。市川さんは「自分たちも拉致被害者も高齢化していく。時間がない」といつも話される。ご家族は人生の半分以上を拉致問題解決に向けて取り組んでこられた。しかし2002年以降、有力な情報は得られず進展がないまま、ただ時間だけが過ぎた。あと何年、被害者家族は頑張らなければならないのだろう。

今しかない。今こそ私たちが関心を持ち、声をあげる時だ。その思いから市川さんと共に署名活動をし、個人でも署名を集め、仲間と共に勉強会も開催した。

その活動の中で気づいたことがある。私たちの世代に限らず、拉致事件以降に生まれた世代には拉致問題の内容をよく知らない人が多い。また、拉致問題を知る世代の一部からは年月が経ち過ぎていて「昔の問題だ」「今さら」という反応もある。これらの状況こそ拉致問題に対する関心を薄くし、解決への機運が高まらない要因のひとつなのではないか。

80代の私の祖父は余生をのんびりと過ごしているが、80歳の市川さんは「今、頑張らないと解決できない」と妻の龍子さんと県内各地で活動している。修一さんを思うご夫妻の言葉は世代を問わず心に響く。私は市川さんたちの思いを一人でも多くの人に伝えなければと強く思う一方、これまでの経験から関心を持ってもらう難しさも感じている。

でも私は諦めない。私には「かえるの会」という共に拉致問題に取り組む仲間がいる。知恵を出し合い、出来ることを実践し、訴え続けたい。「拉致問題は、現在進行形の人権問題であり、決して過去の出来事ではありません。ぜひ、自分事として考えてください。大切な家族や友達が突然いなくなったら、貴方はどう思うのか、どう行動するのか。私は全ての拉致被害者の帰国を、ご家族が笑顔で再会できる日を、強く願っています。

『修ちゃんカエル、必ず帰る』

#### 入賞者のコメント

とにかく時間がありません。遠く離れた地で今も助けを待っている方々がいます。まずは関心を持ちませんか。あなたの一步が大きな力になります。一緒に動きませんか？



特別賞

## 失った人たちの思いと感情

福島県立岩瀬農業高等学校 1年

### 小林 陽菜

横田めぐみさんの拉致事件について知ったとき、私は深い衝撃と怒り、そして悲しみを感じました。1977年、13歳という若さで、何の前触れもなく北朝鮮に拉致されたという事実は、まるで現実とは思えないような恐ろしい出来事です。少女が部活動の帰り道に突然姿を消し、それが国家による拉致であったという真相が明らかになったとき、日本社会に与えた衝撃は計り知れません。めぐみさんのご両親、横田滋さんと早紀江さんは、娘の帰りを信じて長年にわたり真実の解明と救出活動に力を尽くしてこられました。その姿は多くの国民の心を打ち、拉致問題への関心を高めるきっかけとなりました。しかし、どれほど年月が経っても、彼らの願いが完全にはかなえられることはありませんでした。特に父・滋さんが2020年に亡くなられたときには、「娘に会えなかった」という無念がどれほど大きなものであったかを思い、胸が締めつけられる思いでした。

拉致という行為は、ただの犯罪ではありません。それは国家主導の人権侵害であり、家族や地域社会、ひいては国全体に深い傷を残すものです。日本にとって、拉致問題は今もなお解決されていない「現在進行形」の問題です。外交交渉や国際社会への働きかけなど、政府の努力も行われていますが、結果が伴っていない現状を見ると、どれだけ困難な課題であるかを痛感させられます。一方で、私たち国民一人ひとりにもできることがあると感じます。それは、関心を持ち続けることです。事件から何十年も経った今、風化させず、拉致被害者の存在とそこにご家族の苦しみを忘れないことが重要です。めぐみさんだけでなく、他の被害者たちのことも思い、声を上げることが、やがて解決への力となるかもしれません。また、この事件を通して「平和」や「安全」の大切さを改めて実感しました。日常の中に潜む不安や脅威が、どれほど私たちの生活を脅かす可能性があるのか。そして、当たり前のように感じていた自由や安心が、実は非常に脆く、守られるべきものであるということも学びました。

横田めぐみさんの事件は、単なる過去の悲劇ではありません。今も続く現実であり、私たちの未来に向けて何を守るべきか、何を訴え続けるべきかを問いかけています。すべての拉致被害者が一日も早く帰国できる日が来ることを心から願いながら、私もこの問題に関心を持ち続け、できることを考えていきたいです。

#### 入賞者のコメント

読んで頂いた方々に私の考えや熱い想いがうまく伝わった証としての入賞と思い、心から嬉しく思っています。全ての拉致被害者が帰国できるまで、事件が風化しないよう声をあげていきたいと思えます。



## 「普通の日常」を取り戻す

瀧野川女子学園中学高等学校 2年

### 小暮 藍花

朝起きて、朝食をとり、学校に行き、帰って寝る。私は今日まで、この「普通の日常」を当たり前だと思って過ごしてきた。しかし、その「当たり前」が、世界中の誰もが享受できるものではないという現実がある。その例として、北朝鮮による日本人拉致問題が挙げられる。

拉致問題とは、1970年代から80年代にかけて、北朝鮮が日本人を秘密裏に日本国内や海外から拉致したという国際問題だ。その目的は北朝鮮の職員として活動させたり、職員に日本語や日本の習慣を教えさせたりなど様々ある。拉致被害にあった被害者として、日本政府は17名を認定している。

私はこの作文を書くにあたって、様々な記事やサイトを読んだ。その中で特に印象に残ったのは、拉致被害者・曾我ひとみさんの証言だ。曾我さんは、1978年に母・ミヨシさんと共に買い物に行く途中、北朝鮮の職員によって拉致され、約24年間を北朝鮮で過ごし、2002年に日本へ帰国した。しかし、母・ミヨシさんについてはいまだ安否不明のままであり、曾我さんは母親の救出を強く訴え続けているという。私はこの記事を読み、帰国することができた人も、生涯この拉致問題というものを背負っていかねばいけない現状に、胸が痛くなった。自分の家族と引き離されることを想像すると、拉致問題は決して他人事ではないと強く認識させられる。

いまだ多くの拉致被害者の方々が帰国できず、帰りを待つ被害者家族も高齢化が進んでいる。岸田文雄元首相は、「拉致問題は時間的制約のある人権問題だ。」と発言している。被害者と被害者家族が再会できないまま拉致問題が終わってしまわないよう、一刻も早く問題を解決する必要がある。もちろん、政府が一番積極的に動くべきであり、問題を解決できるかは政府の力によるというのが現実だ。しかし、私たちにも、拉致問題を風化させないためにできることがあるはずだ。私たち一人一人ができることは、「拉致問題を知ること」だと私は考える。ニュースに耳を傾け、拉致問題に関する本や記事を読み、家族や友人とこの問題について話し合う。こうした小さな行動の一つ一つが、問題の風化を防ぐことに繋がるのではないだろうか。

拉致により「普通の日常」を奪われてしまった人たちがいるということを忘れず、問題に関心を持ち続けることが大切だ。

#### 入賞者のコメント

拉致問題は、日本全体が向き合うべき課題です。この作文を通して、拉致問題について自分事として考える人が、一人でも増えることを願っています。



## 「奪われた13歳。忘れない、忘れまい。」

八洲学園大学国際高等学校 2年

豊泉 理紗

つい最近まで、私は北朝鮮のことを「危ない飛翔体を打ち上げて、国際的な緊張を高める閉ざされた謎の国」としか認識していなかった。存在自体は知っていても、私たちに直接的な害があるとまでは考えていなかった。しかし、アニメ『めぐみ』を観て、私の考えは大きく変わった。悲しい事件の一面を知り、こうした悲劇は特別な誰かに起こるのではなく、日常の中で突然起こりうるものだという現実を知らされた。

アニメ『めぐみ』は、1977年に北朝鮮の工作員に連れ去られた当時13歳の少女、横田めぐみさんを描いた実話。実は、私の妹がちょうどいま13歳。その年頃と言えば、体つきはまだ子どもっぽくても、心の中ではいろいろなことを深く考え始める時期。私の妹も、夢や将来のこと、時には社会問題についても話すようになってきた。そんな多感な年齢の女の子が、ある日突然に自由、未来、家族を奪われてしまったと思うと、本当に胸が苦しい。

北朝鮮による拉致について少し調べてみると、その被害者は、めぐみさんのみならず、日本だけでなくとも17人。さらには、韓国、タイ、ヨーロッパなど10カ国以上で被害者が出ていると知り、衝撃を受けた。実は私は、日本と韓国のハーフである。2つの国にルーツを持つからこそ、日本人が被害に遭ったことへの怒りに加え、韓国人も被害に遭っていた事実が胸の痛みがさらに強まった。そして、拉致被害事件の多くはいままも未解決ということに深い悲しみとやりきれなさを覚えた。

『めぐみ』の物語は、めぐみさん本人のつらさだけでなく、娘の帰りを信じて何十年も活動を続けているご両親の愛情と強さが描かれている。その姿は、世の中が事件を忘れつつある中でも正義や人権のために声を上げ続けることが大切だと、気づかせてくれる。しかし残念なことに、今の若い世代の多くは拉致問題についてよく知らないか、ほとんど関心を持っていない。これはおそらく、TVニュースを見たり、新聞を読む機会が大きく減ったことも一因であろう。現代の私たちは、たくさんの情報に触れられる一方で、自分の興味のあるものばかりを選び、重い話題からは目をそらしてしまうことが多い。だからこそ、『めぐみ』のようなアニメや記録映画が大切なのだと思う。知識として知るだけでなく、心で感じるができるから。

めぐみさんの物語は悲劇を知ることと同時に過去を思い出し、学び、そして関心を持ち続けるという使命を私たちに与えてくれる。めぐみさんの帰りを待つ母、横田早紀江さんの心情に寄り添い、いつかすべての拉致被害者が再び日本の地を踏めるその日まで、私たちはこの事件を決して忘れてはならない。身の回りの誰かが残酷な運命に直面するようなことが二度と起きないように…。

### 入賞者のコメント

拉致被害は、数十年が経過した今も未解決の人権侵害問題です。作文タイトルの通り、私はこの悲劇を決して忘れません。皆さんにもどうか忘れないでほしい。一人ひとりの関心が希望につながると信じています。



---

**英語エッセイ中学生部門**  
**英語エッセイ高校生部門**

---





## Until they return

3rd Grade, Yonago Hokuto Junior High School

### SUSHIDABANCHI Taishi

Abduction. When people hear the word "abduction," I believe they imagine a villain demanding money in exchange for the person they have kidnapped. But in this case it is very different. A government abducting a person. It's not one person abducting someone; it's a government abducting someone.

This may seem absurd to hear, but it has happened many times over the past 60 years. Japanese people have been abducted by the North Korean government. 17 abductions by the North Korean government have been certified. But more than 800 people are on a list of "likely abductees." In all 47 Japanese prefectures, there is not one prefecture that does not have anyone on a list.

In September 2002 the prime minister of Japan at the time, Mr. Junichiro Koizumi, was able to start talks with the North Korean government, better known as the Japan-North Korea Summit meetings. Here the North Korean government admitted to abducting 17 Japanese citizens and apologized. In the end 5 were sent home to Japan. When Japan asked about the remaining 12, North Korea's response was, 8 dead, 4 never made it into the country.

When someone is abducted, families are devastated. How do people with family members who were abducted feel? I was fortunate to have the opportunity to talk to one of the victims in a lesson at my school. His name is Mr. Hajime Matsumoto, brother of the abductee Ms. Kyouko Matsumoto. Ms. Matsumoto was abducted on October 21st, 1977. She was headed to a knitting class close to her house when she was stopped by two men who likely abducted her.

In the lesson Mr. Matsumoto talked about his sister's hobbies. He said that she was a great knitter and loved travelling. She had plans to go to a shopping mall that weekend and was planning trips. He also talked about his mother, who died without seeing her daughter, and told us that people are getting old. Many families die without seeing their loved ones.

In the lesson I was able to ask Mr. Matsumoto a couple of questions. In one of the questions, I asked him what he would say if and when Ms. Matsumoto came back. His response was "okaeri," which means "welcome home" in Japanese.

When I heard this, I thought of my family and how small actions like saying "Hello," "Good-bye," and "Thank you" are very special. For people like Mr. Matsumoto, these small things are no longer exist.

I believe the best thing that we can do is to let people all over the world know about this tragedy and not look at these abductions as someone else's problem but as all of humanity's mission to solve, as abduction is a human rights violation. It has never been and never will be okay. We all must acknowledge, understand, and tell what happened. So that this tragedy never happens again and that the ones that did happen are solved as soon as possible. We must never forget what happened.



## 彼らが戻るまで

米子北斗中学校 3年

### スシダバンチ 大史

「拉致」という言葉を聞いたとき、人々は身代金を要求する悪人を想像するのではないのでしょうか。しかし、この場合は全く異なります。政府が人を拉致するのです。誰か一人が誰かを拉致するのではなく、政府が人を拉致するのです。

これは耳にすると馬鹿げているように思えるかもしれませんが、過去 60 年間に何度も起きています。日本人が北朝鮮政府によって拉致されてきました。北朝鮮政府による拉致は 17 件が公式に認定されています。しかし、「拉致された可能性がある人」は 800 人以上にのぼります。日本の 47 都道府県すべてに、そのリストに載っている人がいます。

2002 年 9 月、当時の日本の首相である小泉純一郎氏は、北朝鮮政府との会談を開始することができました。これは「日朝首脳会談」として知られています。この会談で北朝鮮政府は、日本人 17 名を拉致したことを認め、謝罪しました。最終的に 5 人が日本に帰国しました。残りの 12 人について日本が尋ねたところ、北朝鮮の回答は「8 人は死亡、4 人は入国していない」というものでした。

誰かが拉致されると、その家族は打ちのめされます。家族を拉致された人々はどんな気持ちなのでしょう。私は幸運にも、学校の授業で被害者の家族の一人と話す機会がありました。彼の名前は松本孟さんで、拉致された松本京子さんの兄です。松本京子さんは 1977 年 10 月 21 日に拉致されました。彼女は自宅近くの編み物教室に向かう途中、2 人の男に止められ、拉致されたと考えられています。

授業で松本さんは妹の趣味について話してくれました。彼女は編み物が得意で、旅行が大好きだったそうです。その週末にはショッピングモールに行く予定で、旅行の計画も立てていました。また、母親が娘に会えないまま亡くなったこと、そして人々が年を取っていくことも語ってくれました。多くの家族が愛する人に会えないまま亡くなっていくのです。

授業で私は松本さんにいくつか質問をすることができました。その中で、「もし京子さんが帰ってきたら、何と言いますか?」と尋ねました。彼の答えは「おかえり」でした。

この言葉を聞いたとき、私は自分の家族のことを思いました。「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」といった小さな言葉がどれほど特別なものか。松本さんのような人々にとって、こうした小さなことはもうありません。

私が思うに、私たちができる最善のことは、この悲劇を世界中の人々に知らせることです。そして、この拉致を「誰か他人の問題」としてではなく、人類全体の使命として捉えることです。拉致は人権侵害です。決して許されることではありません。私たちは皆、この出来事を認識し、理解し、語り継がなければなりません。この悲劇が二度と起こらないように、そしてすでに起きた悲劇が一刻も早く解決されるように。私たちは決して忘れてはいけません。

#### 入賞者のコメント

拉致問題は遠いようで実は身近な問題。他人事として見るのではなく、日本国民一人ひとりが問題を認識し、そして理解し、一日でも早い被害者の帰国に向けて、私たちが声を上げていかなければならない。



# How to solve the abduction issue

3rd Grade, Uto Junior High School

**MURAKAMI Haru**

The North Korean abduction issue is a problem that started in the 1970s and 1980s. During that time, North Korea kidnapped many Japanese people. North Korea wanted to use them to train spies. Many people were taken, and some of them are still missing. This is a serious problem and is still not solved today.

One of the victims was Kaoru Matsuki. He was 26 years old and from Kumamoto. In 1980, he was kidnapped by North Korea. His family did not know what happened to him. They searched for him for many years. They are still hoping he will come home someday. No one knows exactly why he was taken, but his story shows the deep pain his family feels. His family and many people continue to try to find the truth.

Another well-known case is Megumi Yokota. She was 13 years old and lived in Niigata. She was also kidnapped in 1977. Her case became very famous in Japan and around the world. At first, her parents didn't know where she went. When they found out she was taken to North Korea, they were very sad. Her parents have worked very hard for many years to bring her back. Many people in Japan and in other countries support them.

What can we do?

1. Learn and understand. First, we need to learn about the abduction issue. We can study it in school, read books, or watch news programs. When we learn, we can understand how hard this problem is for the victims and their families.

2. Join and support. Next, we can join events or sign petitions. We can also give money to groups that help the families. These actions are small, but they are important. If many people speak up, the government and international groups may take stronger action.

3. Support the families. The families have waited for many years. They are still hoping their loved ones will come home. We can support them by watching TV shows about the abductions or sharing their stories.

4. Tell the next generation. It is important to tell younger people about the abduction issue. If we teach them, this problem will not be forgotten. Learning history helps us avoid the same mistakes in the future.

The abduction issue is not solved yet. People like Kaoru Matsuki and Megumi Yokota are still missing. Their families are still waiting. We must keep learning, supporting, and acting. Each of us can make a difference. Together, we can help bring the abducted people back home.



## 拉致問題を解決するために

熊本県立宇土中学校 3年  
村上 華梗

北朝鮮による拉致問題は、1970年代から1980年代にかけて始まった問題です。その間、北朝鮮は多くの日本人を拉致しました。北朝鮮は彼らをスパイの訓練に利用しようとしていました。多くの人が連れ去られ、その中には今も行方不明の人がいます。これは深刻な問題であり、今日に至るまで解決されていません。

被害者の一人が松木薫さんです。彼は26歳で、熊本県出身でした。1980年に、北朝鮮に拉致されました。彼の家族は何が起こったのか分からず、何年も探し続けました。彼らは今でも、彼がいつか帰ってくることを望んでいます。なぜ彼が連れ去られたのか、正確には誰も分かりません。しかし、彼の物語は家族が感じている深い痛みを示しています。彼の家族と多くの人々は、真実を見つけようとして続けています。

もう一つの有名なケースは横田めぐみさんです。彼女は13歳で、新潟に住んでいました。彼女は1977年に拉致されました。彼女のケースは日本国内だけでなく世界中で非常に有名になりました。最初、両親は彼女がどこへ行ったのか分かりませんでした。北朝鮮に連れ去られたことを知ったとき、彼らは非常に悲しみました。両親は彼女を取り戻すために何年も懸命に活動してきました。日本や他の国々の多くの人々が彼らを支援しています。

私たちにできることは何でしょうか？

### 1. 学び、理解すること。

まず、拉致問題について学ぶ必要があります。学校で学んだり、本を読んだり、ニュース番組を見たりできます。学ぶことで、この問題が被害者やその家族にとってどれほど困難なものか理解できます。

### 2. 参加し、支援すること。

次に、イベントに参加したり、署名活動に協力したりできます。また、家族を支援する団体に寄付することもできます。これらの行動は小さなものですが、重要です。多くの人が声を上げれば、政府や国際機関がより強力な行動を取るかもしれません。

### 3. 家族を支援すること。

家族は何年も待ち続けています。彼らは今でも愛する人が帰ってくることを望んでいます。私たちは、拉致問題に関するテレビ番組を見たり、彼らの物語を共有したりすることで支援できます。

### 4. 次の世代に伝えること。

拉致問題について若い世代に伝えることが重要です。教えることで、この問題は忘れられません。歴史を学ぶことは、将来同じ過ちを避ける助けになります。

拉致問題はまだ解決されていません。松木薫さんや横田めぐみさんのような人々は今も行方不明です。彼らの家族は今も待ち続けています。私たちは学び、支援し、行動し続けなければなりません。私たち一人ひとりが、状況を変えることができます。力を合わせれば、拉致された人々を故郷に戻す手助けができます。

### 入賞者のコメント

拉致問題は遠い過去の話ではなく、今も続いている現在の話です。知ることが未来への力になります。これからの世界を変えていきましょう。



## Bring the abduction issue onto a global stage

11th Grade, Private High School in Tokyo

**ISHIKAWA Towako**

“How could such a tragedy happen here?” As I walked the path from Megumi Yokota’s middle school to her home, this question lingered in my brain.

Having learned about the North Korean abduction recently, I decided to go to Niigata and visit the very place where Megumi was abducted. A plain and almost familiar road, with no indication of any danger. I would have never guessed that such a horrendous crime was committed in such an ordinary setting.

I also had the opportunity to listen to a lecture this February in Nagano by Takuya Yokota, the younger brother of Megumi. Through his words, I truly felt the pain of not only Megumi, but also her family. I was deeply moved by their relentless efforts to spread awareness so that the incident would not be a distant memory. This issue isn’t just about Megumi Yokota either. There are 17 people confirmed to have been abducted, and around 880 people who may have been taken by North Korea. As Mr. Yokota told us, the families of the victims keep fighting every day. We mustn’t forget that they are all wishing to be reunited.

So why is it that this crime hasn’t been solved yet, and what can we do to resolve it? I believe that a big factor is the decline of interest, especially within the younger generation. I was never taught of this issue at school, and it seems to be the case for many other students nowadays. I heard that even the students in Niigata take the story of Megumi as a history lesson, not an on-going problem.

I firmly believe that worldwide cooperation is crucial in resolving this issue, since it is deeply affected by international relations. However, during the 5 years I spent in Russia and the US, I had never heard the problem being mentioned. This needs to change. I have taken my first steps of spreading the word by informing my friends and teachers I met abroad. Although this may seem like nothing compared to the monstrous scale of the crime, each individual effort we make counts. As the families of the victims grow older, it is more necessary than ever to bring awareness to this issue. We are not powerless in this situation. Every word that we use to discuss the issue helps to prevent the story of all the victims from being forgotten. With the rise of social media, our generation is capable of spreading information far and wide at a very fast pace. Making use of this, I plan to disseminate videos by collaborating with the people I have met across the globe and bring the abduction issue onto a global stage.

We must acknowledge the crime as something that involves each and every one of us, and actively seek any solutions to this problem. Just as the families of the victims keep fighting, we must also fight to see the North Korean abduction issue to an end.



## 北朝鮮による拉致問題を世界の舞台へ

東京都私立高校 2年

石川 とわ子

「なぜ、このような悲劇がここで起きたのだろうか？」横田めぐみさんの中学校から自宅までの道を歩きながら、この疑問が頭から離れませんでした。北朝鮮による拉致問題について知った私は、新潟を訪れ、めぐみさんが拉致された場所を実際に見に行くことにしました。そこは、何ひとつとして危険を感じさせない、ごくありふれた感じの道でした。こんな平凡な場所で、あのような恐ろしい犯罪が起きたなんて、想像もできませんでした。

今年2月、長野で横田めぐみさんの弟・横田拓也さんの講演を聞く機会がありました。彼の言葉を通して、めぐみさんだけでなく、ご家族の痛みを深く感じました。事件を風化させないために、懸命に啓発活動をするお姿に心を打たれました。拉致被害は横田めぐみさんだけの問題ではありません。北朝鮮によって拉致されたことが確認されている人は17名、さらに拉致された可能性がある人は約880名にのぼります。横田さんが語られたように、拉致被害者のご家族は毎日闘い続けています。彼らのご家族との再会を願っていることを、私たちは決して忘れてはなりません。

では、なぜこの問題はまだ解決していないのでしょうか。そして、私たちには何ができるのでしょうか。私は、特に若い世代による関心の低下が大きな要因だと考えています。私は学校で拉致問題について教わったことがなく、今の多くの学生が同じ状況だと思います。新潟の学生でさえ、めぐみさんの話を「歴史上の出来事」として捉え、現在進行形の問題だとは思っていないと聞きました。

この拉致問題を解決するためには、国際社会レベルでの協力が必要だと私は確信しています。なぜなら、国際関係に密接に関わる問題だからです。しかし、私がロシアとアメリカで過ごした5年間、この問題について耳にしたことは一度もありませんでした。この状況こそ、変えなければなりません。私は、海外で出会った友人や先生方にこの問題を伝えることを第一歩として踏み出しました。拉致という犯罪の深刻さに比べれば微々たるものかもしれませんが、私たち一人ひとりの努力が積み重なれば大きな力になります。拉致被害者のご家族が高齢化する中、この問題への関心を広げることは今まで以上に重要です。私たちはこの拉致問題を前にして、無力ではありません。私たちが話す言葉のひとつひとつが、被害者の悲劇を風化させないことにつながります。SNSの普及により、私たちの世代は情報を非常に速いスピードで、世界中に発信することができます。この力を活かし、私は海外で出会った人々と協力して動画を発信し、拉致問題を世界の舞台に押し上げたいと考えています。

拉致問題が、私たち一人ひとりに関わる問題であることを認識し、積極的に解決策を探さなければなりません。被害者のご家族が闘い続けているように、私たちも北朝鮮による拉致問題の終結に向けて闘わなければならないのです。

### 入賞者のコメント

拉致問題は、日本が果たさなければならない至上命題です。拉致被害に関して一人ひとりが声を上げることで、解決に一步步近づきます。無関心を今ここに置き去り、一緒にグローバルな問題へと押し上げていきませんか。



# Everyone Has The Right To Be Happy

10th Grade, Uguisudani High School

**SUGIYAMA Koko**

I felt a sense of urgency when I found out that with Keiko's father, Akihiro Arimoto, passing away this February, Megumi's mother, Sakie Yokota, is now the only surviving parent of the abductees. Together with their families, we must now carry all the hopes and wishes that so many people have harbored throughout the years.

At first, I hesitated to write about this topic because I saw the abduction issue as something distant. However, my perspective changed drastically after watching a video message from the families of abductees. I recall Mr. Arimoto saying something that truly stayed with me. He said that he would never complain or simply ask people to "save Keiko," because he believed it wouldn't be a true solution if only his daughter returned. Keiko Arimoto vanished in October 1983 while studying in Europe, and her last letter was sent from Copenhagen, Denmark. Regardless of how much time has passed, her family has never stopped fighting for all the abductees. Their intense gazes and every single word in that video were deeply moving.

That was when I decided to use my own words in English to share their message with the world, creating an opportunity for more people to think about this crucial issue. Why? Because I realized the abduction issue wasn't just "their problem" anymore—it was "ours."

To begin with, I thought about my own life. I live in Aichi and go to school in Gifu. Since I'm far from where the abductions occurred, I had never really thought about it seriously. But that is no excuse to remain ignorant. People all over the world have been working hard to achieve the goal of "bringing all the abductees home." I believe we all have a role to play in understanding this, no matter where we live. As a first step, I think more schools—not just in Japan but everywhere—should require students to write essays about the abduction issue. Writing these essays allows students to actively seek information, develop critical thinking skills, and form their own opinions. When they put their thoughts into words, the issue stops being "their" problem and becomes "my" problem. Therefore, we need to start by creating opportunities in our schools to face these issues head-on.

On the day all the abductees finally land at the airport, I want to be there with their families. I want to say "Welcome home" with all my heart. No matter how small my words may seem, I will keep speaking out in English, hoping that day will come as soon as possible. That's why I'm writing this to you: "Everyone has the right to be happy." And we must not forget that abductions take away that right. With this understanding, everyone must take action to solve this issue and ensure it is never forgotten. The first step can be anything—researching the current situation or watching the animation MEGUMI. Let's work toward making a world where everyone can truly be happy.



## みんなが幸せになる権利を持っている

鷺谷高等学校 1年

杉山 瑚胡

私は、今年2月に拉致被害者・有本恵子さんの父、有本明弘さんが亡くなったことを知ったとき、強い危機感を覚えました。これで、横田めぐみさんの母・横田早紀江さんが、(政府認定の)拉致被害者の親として唯一の生存者となってしまいました。私たちは、家族とともに、長年多くの人々が抱いてきた希望や願いを引き継ぎ、担っていかねばなりません。

最初、私はこのテーマについて書くことをためらっていました。拉致問題を自分とは遠い存在だと感じていたからです。しかし、拉致被害者の家族によるビデオメッセージを見て、私の考えは大きく変わりました。有本さんが語った言葉が、今でも心に残っています。彼は「恵子だけが帰ってくるのでは真の解決ではない」と信じて、誰かに助けを求めるだけでなく、決して不平を言わない姿勢を貫いていました。

恵子さんは1983年10月、ヨーロッパでの留学中に姿を消し、最後の手紙はデンマーク・コペンハーゲンから送られてきました。どれだけ時間が経っても、家族はすべての拉致被害者のために戦い続けています。彼らの真剣な眼差しと、ビデオの一言一言が、私の心を深く動かししました。

そのとき、私は英語で自分の言葉を使って、彼らのメッセージを世界に届けようと決意しました。より多くの人にこの重大な問題について考えてもらう機会を作りたいのです。なぜなら、拉致問題はもはや「彼らの問題」ではなく、「私たちの問題」だと気づいたからです。

まず、自分自身の生活について考えてみました。私は愛知に住み、岐阜の学校に通っています。拉致が起きた場所からは遠く、これまで真剣に考える機会がありませんでした。でも、それを理由に無関心でいるわけにはいきません。世界中の人々が「すべての拉致被害者を帰国させる」という目標のために努力しています。私たちは、どこに住んでいてもこの問題を理解する責任があります。

その第一歩として、もっと多くの学校で、拉致問題についての作文を書く機会を設けるべきだと思います。作文を書くことで、生徒たちは情報を積極的に集め、批判的思考力を養い、自分の意見を持つことができます。そして、自分の言葉で考えを表現することで、この問題は「彼らの問題」ではなく「自分の問題」になります。だからこそ、学校でこの問題に正面から向き合う機会を作ることが必要だと思います。

すべての拉致被害者が空港に降り立つその日、私は家族と一緒に「おかえりなさい」と心から言いたいです。私の言葉がどんなに小さくても、その日が一日でも早く来ることを願って、英語で発信し続けます。だからこそ、私はこの作文を書いています。「みんなが幸せになる権利を持っている」。そして、拉致がその権利を奪うという事実を決して忘れてはなりません。この認識を持って、私たち一人ひとりが行動を起こし、この問題を風化させないよう努める必要があります。その第一歩は、現状を調べることでも、アニメ『めぐみ』を見ることでも、何でもいいのです。みんなが本当に幸せになれる世界を目指して、一緒に歩いていきましょう。

### 入賞者のコメント

奪われたままの幸せがあることを、決して忘れないでください。

たとえ拉致現場から遠く離れていても、この問題を「自分事」として捉える、あなたが踏み出すその一歩が、誰かの幸せを取り戻す確かな力になります。

この作品集は令和7年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された「北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2025」応募作品の中から入賞作品を収録したものです。

文中の表現や表記は、原則として応募時のものに従いました。

令和8年2月発行

北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2025入賞作品集

発行 | 政府拉致問題対策本部

〒100-8968 東京都千代田区永田町1-6-1

TEL:03-3581-8898

<https://www.rachi.go.jp>



令和8年2月  
発行